
ウガンダ海外実践教育プログラム概要

本プログラムは、学生の豊かなグローバルマインドの醸成を目的とし、将来、大きな発展が期待されるアフリカ・ウガンダにおいて、ウガンダ最大の国立大学であるマケレレ大学の協力のもと 2015 年から実施されています。アフリカが抱える課題と可能性を多様な視点から学ぶ内容となっており、マケレレ大学講師陣による英語での社会経済、文化、歴史、農業等の多岐にわたる分野の講義に加え、講義で得た知識を様々なフィールドワークを通じて深めることができます。本プログラムにはマケレレ大学の学生が TA（ティーチング・アシスタント；指導学生）として全日程同行しており、学生のコミュニケーション能力や異文化理解力・異文化交流力の大きな向上効果が期待されます。

フィールドワーク等での地球規模課題についての直接的な体験を通じ、これらの課題を自らのものとして捉え、身近なところから課題解決につなげる価値観や行動力とグローバルな倫理感の育成を目指しています。研修最終日には、参加学生が自分で関心を持ったテーマを選定し、課題解決についてのプレゼンテーションを英語で行います。プレゼンテーションではマケレレ大学関係者らによって採点が行われ、点数および修了証をもとに単位（成績）が認定されます。

本報告書には、2020 年 2 月 26 日から 3 月 21 日までの日程で本プログラムに参加した学生 14 名のウガンダでの気づき、学び、プレゼンテーションのテーマについての考察などがまとめられています。本プログラムを遂行するにあたり、在ウガンダ日本国大使館、JICA ウガンダ事務所および青年海外協力隊員の皆様、ネリカ米振興プロジェクトに参加されている JICA 専門家の皆様には毎年多大なご協力を賜っております。ここに感謝申し上げます。

目次

参加学生一覧	1
2019 年度プログラム日程	2
訪問先概要	3
学生報告書	
和田 佳恋	4
宮田 和瑚	12
北川 千晴	21
西田 澪司	28
足立 理子	35
中津 春	40
荒木 佑哉	47
楠本 ころろ	53
和田 純奈	57
澤根 正佳	63
石坂 知英里	68
芝 玲奈	74
寺田 晃盛	78
石破 さくら	83

参加学生一覧



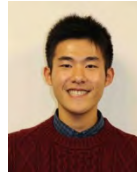
和田 佳恋
農学部生命環境農学科 1年



宮田 和瑚
農学部生命環境農学科 1年



北川 千晴
農学部生命環境農学科 1年



西田 澁司
農学部生命環境農学科 1年



足立 理子
医学部保健学科看護学専攻 1年



中津 春
地域学部地域学科
国際地域文化コース 2年



荒木 佑哉
農学部生命環境農学科 2年



楠本 こころ
農学部生命環境農学科 1年



和田 純奈
農学部生命環境農学科 1年



澤根 正佳
工学部
社会システム土木系学科 2年



石坂 知英里
農学部生命環境農学科 2年



芝 玲奈
農学部生命環境農学科 1年



寺田 晃盛
農学部生命環境農学科 1年



石破 さくら
医学部保健学科看護学専攻 1年

2019 年度プログラム日程

日付・時間	行程・活動
2/26(水)	往路：鳥取→関空 → エンテベ 2月 27日 (木) 着
2/28(金)	在ウガンダ日本国大使館：表敬（日本の対ウガンダ支援の概要） 亀田大使、高田専門調査員 JICA ウガンダ事務所：対ウガンダ援助の概要 深瀬豊所長、斉藤真一所員、今村真理子所員
2/29(土)	休日
3/1(日)	休日
3/2(月)	マケレレ大学：開講式 マケレレ大学:講義（ウガンダの教育制度）(Ms. Martha) マケレレ大学:キャンパスツアー
3/3(火)	マケレレ大学講義（ウガンダの歴史）(Ms. Kyazike Elizabeth) マケレレ大学講義（ウガンダの農業）(Ms. Lucy Mulugo)
3/4(水)	ウガンダの経済・産業 (Elizabeth K. Balirwa)
3/5(木)	JICA コメ振興プロジェクト (PRiDE) 視察・講義・実習（吉野専門家、 野坂専門家、宮本専門家）、現地農家と服部 JOCV 活動訪問
3/6(金)	赤道見学(Masaka Road)
3/7(土)	休日
3/8(日)	休日
3/9(月)	Independent Hospital を訪問し、ClinicMaster の医療サービス現場視察
3/10(火)	Kampala→Mbarara 移動、EcoSmart 視察（説明：Ms. Asimwe Lydia）
3/11(水)	Mbarara 病院と成田 JOCV 活動視察、Mbarara→Kampala 戻り
3/12(木)	マケレレ大学講義（ウガンダの自然保護）(Ms. Lucy Mulugo)
3/13(金)	Murchison Falls National Park 視察、Waterfront ecosystem (Boat cruise)
3/14(土)	Murchison Falls National Park 視察 Study on Land-based Natural Ecosystem (ガイドによる野生動物観察)
3/15(日)	Kennedy Secondary School 交流活動 校長：Bamuleseyo George、他教員、生徒（900人）
3/16(月)	マケレレ大学講義（Effective Presentations）(Mr. Davies Rwabu)
3/17(火)	最終プレゼン準備
3/18(水)	最終プレゼン準備
3/19(木)	最終プレゼンテーション 在ウガンダ日本国大使館表敬、高田専門調査員への報告
3/20(金)	帰路：エンテベ→ドバイ→関西空港（3月 21日）

訪問先概要

- 1) 在ウガンダ日本国大使館
国際協力の在り方や受け手となる途上国の姿勢などについて、大使のこれまでの経歴を交えながら丁寧に説明して頂きました。学生への希望として「情報をありのまま信じ受け入れるのではなく、自分の頭で考えて理解してほしい」というコメントがありました。
- 2) JICA ウガンダ事務所（深瀬豊所長、斉藤真一所員、今村真理子所員）
ウガンダの概要、JICA の理念やウガンダで現在扱っている案件について説明して頂きました。
- 3) マケレレ大学
アフリカで最も歴史が古く、ウガンダでは最大の国立大学。大学の講師陣によるウガンダの歴史、経済、農業、教育などについての講義を英語で受けます。
- 4) NaCRRRI (National Crops Resources Research Institute; 国立作物資源研究所)
JICA のネリカ米振興プロジェクトを行う栽培試験圃場があり、毎年 JICA の専門家の方々によってプロジェクトに関する説明をして頂き、田植えから脱穀までの一連の流れを実際に体験しながら学んでいます。今年はコメを栽培している農家さんのコミュニティーを訪問させて頂き、服部隊員にお世話になりました。
- 5) Clinic Master
ウガンダでは医療カルテ等が紙で管理されている病院が多く、正確で効率の良い医療サービスを受けることが難しいという現状があります。Clinic Master 社はそういった課題を解決するため、様々な医療事務を一括管理できるソフトウェアの開発を行っています。今年は Clinic Master 社のソフトを導入している私立病院を訪問しました。
- 6) EcoSmart
ウガンダの一人分の生理用ナプキンの値段は、最低賃金月収の半分にもなりません。そのため、低所得家庭や難民キャンプで暮らす女性はバナナの皮や葉、汚れた布などを代用品として使用し、重度の感染症を引き起こすこともあります。この課題解決のために、EcoSmart は低価格で再生可能な資源を利用したナプキンの開発を行っています。
- 7) ムバララ病院
ウガンダ西部にある国立の地域中核病院で、JICA のサポートによって地域中核病院を対象に 5S プロジェクトを実施しています (5S: 整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)。今年は、JICA 青年海外協力隊としてムバララ病院で働く成田隊員を訪問し、病院の見学や活動内容についての説明して頂きました。
- 8) マーチソン・フォールズ国立公園
ウガンダでは最大の面積を持つ国立公園で、76 種の哺乳類動物が生息していると言われています。国立公園へ訪問する際マケレレ大学において、事前にウガンダが抱える環境問題や自然保護活動などについての講義を受けました。

ウガンダ実践教育プログラムをとおして

農学部生命環境農学科 1 年

和田 佳恋

目次

1. 志望理由
2. 私が実際に見たウガンダ
3. プレゼンテーション
4. エコス마트
5. マケレレ大学の講義
6. 多くの人との出会い
7. 最後に



このプログラムに参加して本当に良かった。

1. 志望理由

私はこのプログラムに本当に軽い気持ちで応募した。それは、「アフリカって一人じゃいけないから応募してみよう」というものだった。出国前にウガンダのことについては様々なうわさを聞いていた。朝、昼、晩、バナナを食べる。貧困。緑豊か。渋滞ひどい。実際に行ってみると、正しいこともあったが噂と違うこともたくさんあった。これから私がうわさで聞き、イメージしていたウガンダと私が実際に見たウガンダについて話そうと思う。

2. 私が実際に見たウガンダ

まずは、食事についてだ。私の中のイメージは、主食はキャッサバなどのイモ類が多く、お米は高級品でなかなか手に入らない。味付けは独特の香辛料が使われておりあまり口に合わない。実際に行ってみてまず驚いたのはお米が日常的に出てくることだ。高級品であまり普及していないと思っていたが、ホテルではもちろん、学食でも普通に置いてあった。同時に主食としてマトケは置いてあったが、私たち日本人の口にはあまりあわないと思った。TA さんの話によると、マトケは柔らかく食べやすいため



50代以上の人には好まれるが、若い人たちはあまり好まないらしい。最近では調理がしやすい点、保存がきく点からお米を食べる家庭も増えているらしい。ウガンダでは NaCRRI の施設を訪ね、お米の栽培や普及について様々な話を聞いた。ウガンダの米栽培は機械がほとんどなく手作業が主になっている現状をきいた。その労力と時間は想像を絶する。だからこそ付加価値がつくのかなとも思う。ウガンダは気候に恵まれているため、米を栽培するには適しているし、実際にお米を育てている農家のほうが、収入がよく、お米が農家の間で普及するメリットは大きいと思う。しかし、マトケとは違って収穫するまでの手間がかかる点や、栽培方法を雑にすると収量が大幅に減少する点など、始めるのが難しいのが現状だ。例え機械を導入したとしても動かすための燃料費の問題や機械を正しく扱い、点検・整備することが必要だと思う。一筋縄ではいかないことを感じた。主食以外の料理では美味しいと感じるものが多かった。肉が焦げすぎたり、砂が料理に混じったりなどはあったが、味付けが甘すぎるとか辛すぎるとかは特になく、ホテルでは

いろんな料理を楽しめた。食事をするにあたって面白かったのは、同じメニューでも日によって量や付け合わせなどがころころ変わることだ。例えば、ホテルのカルボナーラだ。使われているパスタの種類、量、上に乗っかっているもの（ネギやパクチーなど）が日によって全然違うのだ。パクチーはあまり好きでない人が多く、初めて料理に乗って出てきたときは、驚いて食べるのに苦労していた人が多かった。ほかのメニューも日によっていろんな形で提供されるため、ある意味飽きなかった。固定のレシピがなく、作る人やその日余った食材によって違うのかな？と思った。日本ではなかなかないことなのでとても新鮮だった。

私がウガンダで食事をするにあたって感じた問題点がひとつある。それは、食料廃棄の問題だ。アフリカを含む世界では人口増加に伴い、食糧危機の問題が深刻化している話はよく耳にする。私は今回主に首都のカンパラにいたので食糧不足を感じることは全くなかった。その一方で食料廃棄をたくさん目の当たりにした。ウガンダでの食事はホテル以外ビュッフェ形式が多かった。基本的に主食はマトケ、米、ポシヨなどたくさん用意されており好きなだけとれる。それから、肉の入ったスープを一種類選んでかけてもらうという形が多かった。何も係の人に



言わないと、基本大量にお皿に盛りつけられてしまうのでいつも少なめにとっていた。そのたびに、それで足りるか全然食べないねと現地の人から言われた。たしかに学食にいた現地の学生と比べると量が倍ぐらい違っていて、日本人は食べる量が少ないのかなと思った。しかし、実際に食べ終わってみると、もちろん全部食べている現地の人もいたが、多くの人が食事を残しているのが目についた。中には半分以上残している人がいたのが衝撃的だった。日本では小さいころから残すのはよくないこととする慣習があるが、ウガンダにはないのだろうかと思った。食糧不足や栄養失調の子が少なからずいると聞く一方で、食料廃棄の問題があるということは国の中の格差が浮き彫りになっているということだと思う。食堂などで廃棄されている食品について調査はできなかったが、ウガンダであるということはほかの国でもそういうことがあるのかなと思ったし、日本の食料廃棄の問題についても興味を持った。

次に環境のことについて話そうと思う。緑豊かな国と聞いていたが本当にそうだった。カンパラ市内でも緑がみられるところが多く、気候に恵まれていることが感じられた。また、マーチソン・フォールズ国立公園で見た景色には圧倒された。日本だと動物園でしか見られないような動物が実際に大地を駆け回っていたり、草を食べていたり、夢のような時間だった。そんな国立公園がたくさんあるウガンダはとてもすごい国だし、これからもその自然を守っていかなければいけないと感じた。そんな自然豊かなウガンダだが、街中では道端のゴミが目立った。そこで生活している人はまるでそこにゴミがあるのが当たり前のように過ごしていた。スラムのほうではゴミが高く積み上げられているのを見た。見た目的にも衛生的にもよくはない。マケレレ大学の中や街のいたるところでそんな景色を見たため、ゴミが落ちているのが日常なことなのだと感じた。このプログラムに参加した人の中にゴミ問題を最終プレゼンテーションに取り上げている人が何人かいた。そこで、私はゴミの回収の頻度が少ないことや、分別という概念がないことなどを知った。日本ではごみは地域によって多少、差はあるが、何種類かに分別されており、毎週何回も回収される。分別も回収の仕方も国民にとっての日常や当たり前を変えないといけないものであり、国規模の問題になってしまう。そして、お金ももちろんかかる。私たちができること～などというが、結局は政府頼りになってしまうことが多く、無力さを感じた。

もう一つ私が気になった環境についての問題は、環境汚染だ。ウガンダのカンパラでは渋滞がよく起こるといって話を渡航前によく聞いていた。そのため、実際に渋滞に巻き込まれてもあまり驚きはしなかった。ただ、大量のボダボダ（ウガンダのバイクタクシー）には驚いた。車の間を

無理やり通り抜けたり、時にはバスにぶつかったりする。乗客も不安定なはずなのに、ちゃんとつかまっている人がほとんどおらず、スマホをいじっていたのに衝撃を受けた。大量のボダボダは車の行く手を阻み渋滞を悪化させる。また、ウガンダでは環状交差点がよくあった。これは、交通量が少ない都市ではとても有効だが、交通量が多すぎるウガンダではかえって渋滞を生んでいた。一度入ると、車がひしめき合い、抜けだすときは無理やり、という言葉が正しいようなものだった。ここでも車の間をすり抜けようとするボダボダがたくさんあり、とても危険だった。日本では車の死角に入らないようになどあるが、そんなことはボダボダには関係なかった。ウガンダでは多くのマタツ（ワゴン車タイプの乗合いタクシー）も渋滞を作っていた。渋滞の時はもちろん、普段バスで市内を走っているときに感じたのは空気の汚さだ。最初は窓を開けていても市内に入るとたんに空気が悪くなるので、みんな一斉に窓を閉めた。私はこの空気の悪さが気になり、最終プレゼンテーションで大気汚染を取り上げることにした。この次からは私がプレゼンテーションで話した内容を書こうと思う。



3. プレゼンテーション

私はまず、ウガンダの大気汚染の現状について知ることからはじめた。JICAによると、カンパラ市のPM2.5の濃度はWHOの基準の6倍以上を占めている。また、ウガンダの丘が多い地形が空気を閉じ込め、大気汚染を深刻化させているという話も聞いた。私が今回プレゼンテーションをするにあたって利用したのは、世界の大気汚染をリアルタイムで測定し公表しているサイトだ。リアルタイム汚染度の指標とされているのはAQIスケールだ。AQI（大気汚染度指数）は、粒子状物質（PM2.5 およびPM10）、オゾン（O3）、二酸化窒素（NO2）、二酸化硫黄（SO2）および一酸化炭素（CO）排出物の測定値に基づいている。測定値は0～500の指数で表されており、6つの健康影響のカテゴリに分けられる。0～50（緑）…良い、50～100（黄色）…中程度、100～150（橙）…健康に悪い（過敏グループの場合）、150～200（赤）…不健康、200～300（紫）…非常に健康に悪い、300～500（黒）…危険な、とされている。150以上のレベルになると喘息などの呼吸疾患を有する人々は長時間の運動を避けなければならない、200以上の非常に健康に悪いレベルに達するとすべての人が野外活動を避けたほうがよい状況になる。ウガンダに注目しよう。写真1は、3月18日水曜日、朝8時のデータだ。見たらわかるようにウガンダは赤の不健康なレベルが多く、中には最も危険な黒色のレベルに達している部分もある。これだけで、ウガンダの大気汚染の汚染度が高いことが見て取れると思う。今回はこのデータの中から、カンパラにあるアメリカ大使館でとられた大気汚染データを使い、話を進めていく。

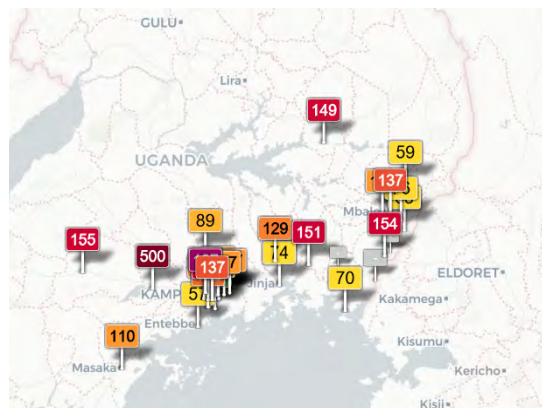


写真1

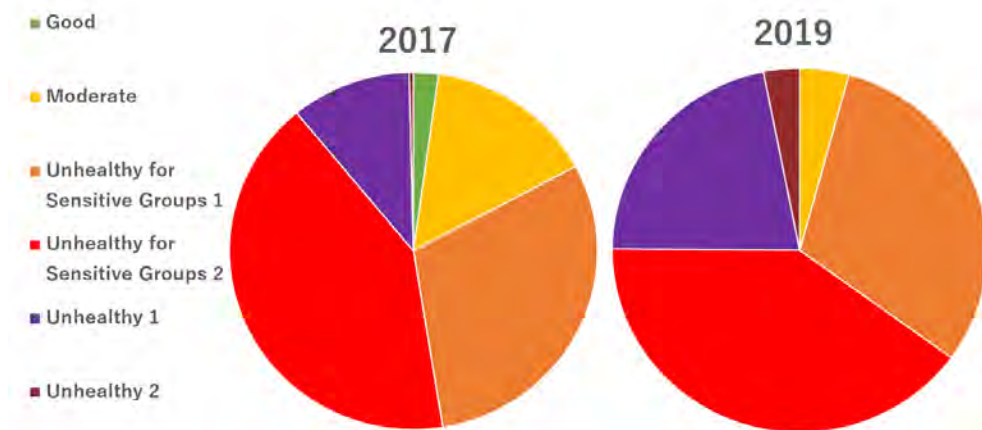


図1 一年間の各大気汚染レベルの一日の平均比率

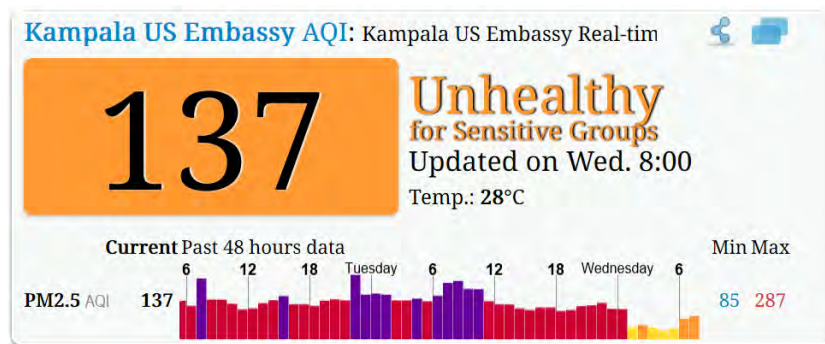


図2 3月18日水曜日午前8時から48時間の大気汚染レベル

私がまず注目したのは大気汚染度がここ数年でどのように変化しているかだ。図1の円グラフは、2017年と2019年の一年間の各大気汚染レベルの一日の平均の比率を示している。先ほど説明した大気汚染レベルのうちの健康に悪い（過敏グループの場合）と不健康のレベルが多かったためどちらも2つに分けた。円グラフを比較していただければわかる通り、緑や黄色の部分が減少し、赤や紫の部分が大幅に増えているのが分かる。ここから、大気汚染が二年間でひどくなったことが読み取れる。ひどくても、不健康というレベルでとどまっているため、大気汚染度があまり高くないように感じてしまうが、忘れてはならないのは、このデータがあくまで一日の平均をもとにしているという点だ。つまり、交通量が少ない時間帯なども含まれた結果だ。それにもかかわらず、不健康というレベルに達することがあるカンパラの交通量の多さや、空気がどれほど汚染されているか考えると恐ろしい。次に私が注目したのは一日あたりの大気汚染レベルの変化だ。この図2はデータを取った3月18日水曜日午前8時からさかのぼること48時間の大気汚染レベルの変化を表している。まずは全体の色を見てほしい。赤や紫がほとんどを占めているのが分かる。つまり、不健康、非常に健康に悪い、のレベルだ。次に時間帯に注目してほしい。図2の紫の非常に健康に悪い状態になっているのは、月曜から火曜にかけての夜遅い時間帯と火曜日の朝の時間帯だ。この時間帯は、帰宅・通勤ラッシュにより交通渋滞が起きやすい時間帯と一致する。このことから、交通渋滞と大気汚染は密接に関係していると推測できる。これは、水曜日のデータからも読み取れる。見てのとおり、水曜日は大気汚染のレベルが前2日間と比べ低いのが分かるだろう。これは、天気の影響だ。水曜日は晴れていたが、前2日間は雨だった。どうして大気汚染と天気に関連しているのだろうか。晴れの場合、人々は職場や学校まで徒歩で行くか、ボダボダを使用する人が多い。しかし、雨の日は歩いたり、ボダボダを使うと雨に濡れてし

まうため、人々は自分の車やマトツを使うことが多い。そのため、交通量が増え渋滞が起きやすくなる。そして、これによって大気汚染のレベルが上がってしまうのだ。

私は、これらのデータから大気汚染を改善するために2つの提案をした。1つ目は交通渋滞の改善だ。ずっと述べてきたように交通渋滞と大気汚染は密接に関係している。そのため交通渋滞を減らすことが大気汚染を改善する近道だと考えた。交通渋滞の改善のために私が提案したのは、大型バスの利用だ。日本ではごく普通に街を走っているバスだが、ウガンダではほとんど見かけなかった。大きくてもマトツ程度だ。もし、日本の市バスのような仕組みが導入されればたくさんの人々を一度に運ぶことができ、ボダボダやマトツの数が減り、渋滞が改善されると考えた。今考えてみると、市バスのような仕組みは新たな雇用を生むこともできるが、ボダボダの利用は減ってしまうため、それを収入源にしている人は職を失うことになってしまう。バイクは運転するのは簡単かもしれないが、バスを運転するにはバイク以上の運転技術が必要なうえ、あの交通量の中バスを運転するのは至難の業だ。2つ目に私が提案したのは、大気汚染について人々に知ってもらうことだ。私たちは比較的、空気がきれいな環境なところからウガンダを訪れたため、カンバラの空気はとても汚く、息苦しく感じた。しかし、現地の人々はその空気の中で生まれ育ち、日常的にその空気を吸っているため、多少汚いと感じていても私たちほど敏感ではないだろう。日常になりつつある大気汚染の現状や、いかに健康に悪いかをまずは知ってもらうことが大切だと思う。国民一人一人の少しの意識の変化が社会を変えるのだ。2つの提案をしたが、どちらも国や政府の協力が不可欠なものだ。ゴミの問題のところでも述べたが、結局は国が動くのが近道なのだ。しかし、これは同時に費用などの点から遠回りでもある。とても無力に感じる。

4. エコスマート

ウガンダで様々な施設を訪れた。企業の中で印象的だったのは、エコスマートという会社だ。この企業は女性の生理用品を開発している会社だ。ウガンダでは女性のドロップアウトが多い。これは、生理用品の値段が高く、手に入れることのできない女性が生理中、学校に通うことが難しくなるからである。この会社は、環境にやさしく、低コストの生理用品を開発することによって、女性の社会進出を手助けしようとしている会社だ。一般的な生理用品にはコットンが使用されているが、値段が高いため、コットンに代わるような、自然にやさしく、使いやすい材料を見つける必要があった。ソルガムやメイズなど様々な繊維を試したが、その中でサトウキビが一番適していたようだ。使用するのはサトウキビを絞った後の皮だ。通常は廃棄される部分のため安く手に入る。これを粉碎し、黒くなるまで5時間かけて煮詰める。次にこれを白くするために6回かけて洗う。生理用品は清潔感が大事である。洗ったものにトイレットペーパーを2回に分けて混ぜる。このトイレットペーパーも、きれいなロールを作る際に切り落とした廃材を使うため安く手に入る。この混ぜたものを、木で作ったフレームに布を張ったものに厚さが均一になるように水の中で調整しながら、のせる。日本でいうと、和紙を作る工程とほぼ同じだと思ってもらいたい。フレームごと乾燥させ、紙のようになったところをもう一度粉碎する。この工程によってより肌触りがコットンに近くなるのだ。この繊維を機械にかけ成型する。表面に使うシートは中国からの輸入品だ。このシートを生姜の繊維から作ろうという話が持ち上がったこともあったが、しょうがの繊維は固い部分があり、生理用品に使うには危険と判断されたようだ。



この会社にはいま直面している4つの問題がある。1つ目は機械の問題だ。私がこの会社で見た機械は小型のもので、日本の企業である「花王」から提供されたものもあった。機械があるといっても、人の手を使うものが多く、手作業の工程もある。そのため、どうしても生産に時間がかかってしまう。しかし、大型の機械を導入するには費用の問題はもちろん、電力の問題もある。

ウガンダの電力供給システムはとても安定しているとはいえ、一度に大きな電力を使うことはリスクを伴う。2つ目はサトウキビの皮の仕入れにある。この会社はウガンダの西部に位置しているが、仕入れ先はなんとそこから400キロも離れた東ウガンダの砂糖工場だった。5トンの廃材をトラックで一度に運ぶと、2,000,000UGX（約6万円）かかる。安い生理用品を作るにあたって、この出費は大きな痛手になる。3つ目は輸入しているシートに関する問題だ。現在コロナウイルスが流行しているため、中国の工場の生産がストップしていて、シートが手に入らないのだ。4つ目は支援に関する問題だ。エコスマートはまだウガンダ政府から直接支援を受けていない。スポンサー企業はいくつかあるが、花王は3月いっぱい契約が終わるなど、予算が足りないのが現状だ。今はまだ試験段階のため販売はしていない。どこに消費者がいて、どのようにして届けるか、市場調査をしている最中だ。販売価格の目標はひと箱1000UGX（約30円）である。もしこの価格が実現すれば、女性の社会進出の大きな助けとなるだろう。厳しい状況ではあるが、実際に女性に使ってもらい改善点を見つけ、パッケージもより手に取りやすいようにかわいくするなど、消費者優先、消費者目線を大切にしているところが印象に残った。

5. マケレレ大学の講義

このプログラムでは、マケレレ大学の先生のいくつか受ける機会があった。どれも興味深かったが、その中でも効果的なプレゼンテーションの講義を受けることができてとてもよかった。作り方の部分では、まずなぜプレゼンテーションをするのかを学んだ。なぜ作るのかについては考えてこなかったのが新鮮だった。聞き手を説得するためなのは予想がついたが、相手にインスパイアを与えるという視点はなかなか思いつかなかった。考えてみれば、人のプレゼンテーションを聞いているとき自分も無意識にいろんな刺激を受けているなと思い、不思議な気持ちになった。より良いものを作るには、不安をコントロールする、聞き手中心のものを作る、目的を達成する、自分と聞き手を楽しませる、時間を守る、の5つが大切だと知った。聞き手中心や時間を守るのは当たり前のことだが、不安のコントロールや楽しませるなど、精神面が大きく関わっているのが意外だった。プレゼンテーションは授業でやるが多かったのも、楽しませるという考えがあまりなかった。また、自分も楽しむことが大切だと聞いたのは驚いた。たしかに自分が話していてわくわくするものや、見ていて面白いと感じるプレゼンテーションを作らないとほかの人に楽しんでもらえない。プレゼンテーションを作る際、私はいつも内容ばかりを考えて作っていた。しかし、作る時にはいろんなことを最初に知る必要があると知った。ここでも聞き手を知ることが大事と先生がおっしゃっていた。何人いるかななどの基本情報だけでなく、相手の知識レベルやなぜその場に出席しているかなど深いところまで考えないといけないと学んだ。聞き手がいかにプレゼンテーションにおいて大切か感じた。聞き手重視という面では他に導入の大切さを学んだ。最初の挨拶や自己紹介の時にいかに短時間で自身のことを知ってもらい、好感を持ってもらえるかが大切だと。人は好きな人の話は聞く、と聞いてとても納得した。ユーモアを交えたり、小話を入れるのは、少しハードルが高いが、笑顔であいさつなどすぐ始められるものもあり、参考になった。話す際のふるまいも重要だ。前を見るのはもちろんだが、適度な身振り手振りをしたり、笑顔で話したりが挙げられる。私が聞いていて意外だったのは、適度に歩くことだ。棒立ちはもちろんよくないのは分かるが、歩くという発想が今までなかった。もちろん歩きすぎは良くないが、少し歩くことで、自分自身をリラックスさせる効果があるほか、相手に固まった印象をあたえない。この講義では見やすいプレゼンテーションの作り方についても学習した。人の視線の移動や、見やすい色味、デザイン、文字の大きさなどだ。とても具体的に話して下さったので、最終プレゼンテーションの時に実践しやすかった。

私がプレゼンテーションで最も苦手なのは質疑応答の時間だ。今回最終プレゼンテーションをして、また、ほかの人にも聞いていて思ったのは、プレゼンテーションを作る際に自分の意見を持つことが何よりも大切だということだ。多くの質問は知識の部分ではなく、本人の考えについてのものが多かった。プレゼンテーションを作る際に自分の考えを持たず、調べた情報に頼って

しまうと、質疑応答に対応できないし、効果的なプレゼンテーションができるとは思えない。質疑応答の際に、もう一つ大事な点は、自分に素直になることだ。大学でのプレゼンテーションは先輩や教授に向けてする機会が多々ある。その人たちは、自分よりもたくさんの知識や深い考えを持っており、時には問題点を指摘されたり、予想外の質問をされたりすることがあるだろう。その時にうろたえるのではなく、正直にわかりませんと言う勇気が大切である。もちろんすぐにあきらめるのは良くないが、自分に正直になることはとても大切である。この講義は私のプレゼンテーションに対する考え方を大きく変えてくれた。最終プレゼンテーションの時、教わったことをいくつも取り入れたことで、自然と自分のプレゼンテーションに自信を持つことができた。これから、プレゼンテーションする機会は増えるばかりで、不安や苦手意識がまだあるが、今回の講義でその奥深さを知ることができたのでより、効果的なプレゼンテーションを作ることができるよう頑張りたい。講義の内容をどれだけこれから継続して実践できるかは分からないが、メモに残して、プレゼンテーションを作る際は意識して活用したい。

6. 多くの人との出会い

冒頭、私はこのプログラムに参加できてよかったと述べたが、その一番の理由は多くの人との出会いにある。ケネディセカンダリースクールでは、多くの子供たちと話した。みんな笑顔がかわいくて、たくさん話しかけてくれて、とても幸せな時間だった。ただ、一つ驚いたのが、子供たちが質問してくる内容だ。私の学部や将来の夢、日本の大統領などについて質問された。日本の食事など簡単な質問を予想していたので驚いた。隣の子は、小説を持っていて、内容を尋ねると、政治の話だった。ウガンダの子供たちは本当に勉強熱心だと思った。私は大学生だが、外国人にいきなり大統領を尋ねようとも思わない。将来の夢を子供たちは一人一人持っていて、目がキラキラして見えた。



このプログラムに共に参加した日本人メンバーとの出会いも私にとって、とても大切なものになった。私は参加前からの友達が多く、最初のほうは同じようなメンバーとばかり行動していた。だんだん、他の人達とも打ち解けていった。ウガンダでは楽しいことだけでなく、予想外の出来事もたくさんあった。同じ状況に立たされていても考え方の違いから、相手をよく思わないことも時々あった。だが、一緒に過ごす時間が長くなればなるほど相手のことを受け入れられるようになった。終わる頃には仲がとてもよくなった。短い大学生活の中で、私にとってとても大切な人間関係ができた。

私はまだ将来やりたいことが分からない。メンバーの中には好きなことや研究したいことがある人や、将来をととても細かく考えている人もいた。最初はその人たちの話を聞くと焦りばかり感じていた。でも、約3週間半の間に、たくさんの新しい景色を見て、些細なことでも意見を共有し、共感しあったことで多くの考え方に触れることができ、自然と自分の視野が広がったように思う。将来やりたいことはまだ見つかっていないが、面白そうだなと感じることや、自分なりの考えを持つことが増えた気がする。

多くの人と出会った中で、TAさんたちの存在が一番大きかった。初めての体験ばかりで不安なこともあったが、ずっとそばにいて助けてくれた。うまく英語が理解できない時も嫌な顔ひとつせず、分かるまで何度も説明してくれた。私たちが気持ちよく過ごせるように時間を守ってくれた。家が遠くて私たちより何時間も早く起きる大変な生活を送っていたのにも関わらず、朝会うと笑顔で話しかけてくれた。ウガンダのマナーを知らずに、食事中、会話してしまっていたが、何も言わずに受け入れてくれていた。今述べたことはTAさんが私たちにしてくれたことのほんの一部でしかない。言葉では言い表せないほど感謝している。

TAさんたちはマケレレ大学という名門に通っているのもあり、知識量がすごかった。それぞ

れ専門分野があるはずだが、どの分野の質問をしても簡単に答えが返ってくる。ウガンダのことについての質問をすることが多かったが、どの TA さんもとても楽しそうに話していたのが印象的だった。ウガンダのことが好きということがとても伝わってきた。私は、日本の国の政治や経済について質問されてもまともに答えることができないと思う。もっと自分の国を知らなきゃなと思った。また、知識だけでなくその考え方にも驚いた。日本の大学では基本生徒は受け身の状態だが、ウガンダでの授業では、講義中に先生が投げかけた質問に答えるだけでなく、生徒が自ら意見を積極的に発言していた。そして、いいことや共感できることを述べた人がいたら、みんなで拍手を送る。参加していてとても面白い授業だったし、自分で考える力も付いた。そんな授業を当たり前を受けているからなのか、将来の夢もすごかった。院では学部と違うことを学び、お金がたまったら子供たちのための施設を建てたいと言っていた。いろんなことを貪欲に学ぼうとする姿勢や目標を実行に移したいという思いに心打たれた。とても同い年とは思えなかった。私もなにか夢中になれるものや目標を見つけたいと思った。TA さんたちとの交流は、私にいい刺激とたくさんの思い出を残してくれた。国や文化、宗教が違って、理解し合える、大切な友達だ。

7. 最後に

最後に、ウガンダまでついてきてくださった安藤先生、蕪木先生、このプログラムを企画し支えていただいた、鳥取大学、マケレレ大学の先生方、このプログラムへの参加を許してくれた両親、ともに 3 週間過ごした日本人メンバー、TA さんたちに心から感謝したい。このプログラムでの貴重な経験をこれからの大学生活に活かしていきたい。

ウガンダ実践教育を通して

農学部生命環境農学科 1 年
宮田 和瑚

目次

1. 参加動機
2. ウガンダのイメージと現状
3. プレゼン内容－経済的問題点と解決策の提案
4. 解決策の提案 2
5. 日本とウガンダの経済格差
6. ウガンダに見習うべきだと思ったこと
7. エコスマートを訪問して
8. プログラムを通して

1. 参加動機

私が今回、実践プログラムに申し込んだ理由は 2 つある。1 つ目はこの研修を通して将来を考えられたらいいなと思ったからだ。私は小さいころから親が国際交流を大事にしていることもあり、いろいろな国の人と出会ってきた。中でも小学校 3 年生の時に会ったモンゴル人の女子高校生がきっかけで国際協力に興味を持った。なぜなら、その人が途上国と先進国というものがあること、日本は恵まれているということを教えてくれたからである。この時から私の夢はずっと貧しい国を支援することである。しかし、どうやって支援を行うのか、どういう支援が本当に必要なかわからず、国際支援をしたいと言いつつも具体的に何をしたいのか決まらず、何となく農学部に入ってしまった。だからこそ、大学 1 年生という早いうちに将来を考える必要があるなと思っていた。今までも将来何がしたいのか考えるために途上国を訪れボランティア活動を行ったことは何度かある。しかし、アフリカは旅行では行ってもその地域に住んでいる人と直接関わることはなかった。そのため今回のウガンダ研修は私の将来を決めるのに役立ちそうだなと思った。2 つ目は視野を広げられたらいいなと思ったからだ。今までいろいろな国に行き、そのたびに日本の常識では考えられない様な文化に出会ってショックを受けたり、新しい気付きを得られたり、日本人にはない心の豊かさに出会ったりしたので、大学生のうちにもっとたくさんの国に行き視野を広げたいと思っていた。

2. ウガンダのイメージと現状

ウガンダに着いて思ったことは、予想よりはるかに発展しているということだ。アフリカといえば壊れそうな車に赤土の舗装されていない道路、家は土と藁で大家族というイメージだった。しかし、実際はきれいな舗装された道路に、今でも日本で走っているような車で、家も日本とあまり変わらないんじゃないかなと思うくらい立派なものでイメージとの差に驚いた。また、ホテルもクーラーが効いていてお湯も出るし、水も透明でエントランスもソファや机があってとてもきれいだった。着



いた日のウガンダに対しての印象は思っていたより裕福な国というものだった。しかし、経済の授業で数値的に経済状況を習い、GDP の低さなどの経済状況に驚かされた。日本に比べると 70 分の 1 ほどしか GDP がなく、1 か月あたり一人 6000 円にも届いていなかった。工事もたくさんしているのになぜなのか不思議に思った。また、一日 1.90 ドル未満で暮らしている人が多くいる

ことにも驚いた。農業に従事している人口は70%を超えるのに、農業の占めるGDPが24%しかないことはとても不思議に思った。残りの30%に満たない人で、GDPの75%を賄うことになる。農家さんの収入はいったいどの程度なのか気になった。一方で人口増加をされていて水資源があり自然条件に恵まれていて、経済成長率が大きい。国が経済成長をする条件も割とそろっているのではないかと思った。そこで私はウガンダの経済に興味を持ち、この留学期間、経済的な問題を探してみた。

カンパラでは、基本道路は整備されていて家や車もきれいなものが多い。一方で、NaCRRRIに行った際には、赤土むき出しのボコボコな道路で、バスでぼこぼこ道を通ると飛ぶことも何度かあった。道路が舗装されていないためバスの窓を開けると白いTシャツが茶色になった。



車も少なくカンパラのような渋滞はなかった。町から少し離れた場所に住んでいる人たちは、車やバイクを持っていないため農作物を町に持って行って売ることができず、見に来たエージェン트가買っていくため安く買われている可能性があると言っておられた。その地域の家はウガンダミュージアムで見たような土と藁で作られた昔ながらの家だった。日本では東京でも鳥取でも同じように舗装された道路で、家も同じようなものである。ウガンダは都市部と農村部で収入に格差があるという話は聞いていたが、道路や家までこんなに違うのかと驚いた。

一番衝撃を受けたのは、NaCRRRI どうかだった農村の人たちが英語を話せなかったことだ。ウガンダは公用語が英語なので、みんな話せるものだと思っていた。TAさんもウガンダでは小学生の時から授業は英語だと言っていた。そのため英語が話せない人たちは小学校に行けていなかったのかなと思った。農村部では農業を手伝うため学校へ行けない子供たちがいるというのを本で読んだことがあったので、そういったお手伝いのために学校へ行けなかったのかなと感じた。カンパラで出会ったマケレレ大学の生徒やケネディーセカンダリースクールの子供たちは、自分たちの国に対してとても詳しくて自分の専攻はもちろん専門外のことでも質問したらわかりやすく教えてくれて、夢も持っていて賢い人たちばかりだった。そういった私たちみたいな先進国から来た人たちよりもはるかに知識がある人たちがいる一方、公用語も話せない人たちがいるというのは都市部と農村部で大きな格差があるのだとショックを受けた。都市部と農村部で収入に2倍の差があると習ったが、こういう教育の機会の差も関係しているのだろうと感じた。



また、マーチソンフォールズ国立公園に行った際、バスから窓の外を見ていた。行きの道は一応舗装されている場所もあったが歩道のほうはガタガタで、道のわきにはごみが大量に捨てられていた。家もカンパラのようにコンクリート造りでないものも多くあった。帰りの道はと



てもきれいだっただ。しかし、WFPのトラックが止まっていたり、水を汲みに行っている子供たちがいたり、頭にバナナなどを乗せて歩いている女性たちがいた。観光客が来る場所だからか道路

はきれいだったため、ついつい発展している場所と勘違いしてしまっていたが国連の車を見てこの地域は貧困の人が多いのかも知れないということに気づかされた。

3. プレゼン内容－経済的問題点と解決策の提案

私はウガンダで滞在期間、経済問題に注目し調べ、特に問題だと思ったことが3つある。1つ目はGDPの低さである。ウガンダのGDPは307.7億米ドルで1人当たり約1か月6000円にも満たない。マケレレ大学の経済学の先生は日本で私たちの親が私たちに使っている金額がウガンダの大学の先生の給料と変わらないとも言っていた。また、ただGDPが低いのではなく、大きな格差があるうえでこのGDPの低さであるということが問題であると思った。男女で約2倍の差があり、農村部と都市部でも約2倍の差があると習った。GDPを収入として考えるとすると、単純計算で月2000円以下で暮らしている人がいるということになる。これと関係して問題だと思ったことが2つ目の問題である。

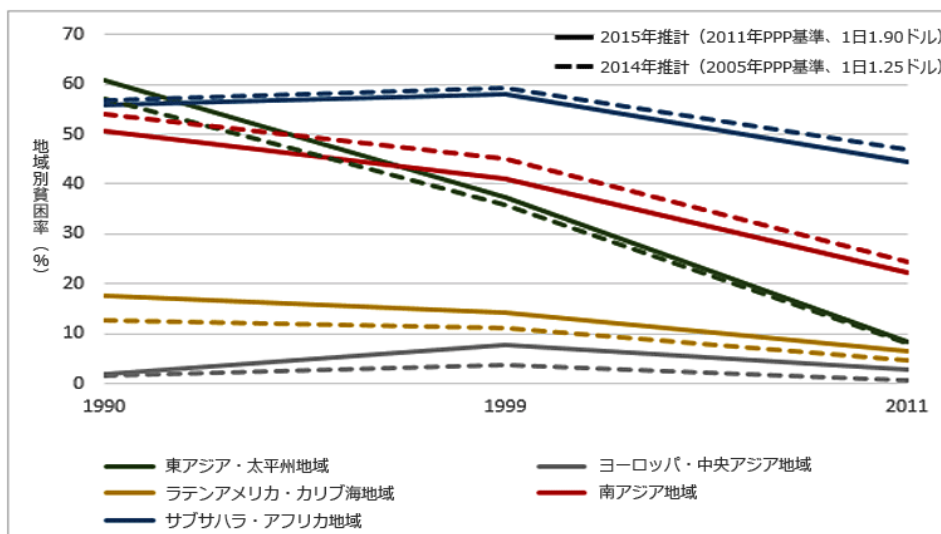


図 新旧国際貧困ラインを用いた各地域の貧困率比較
<https://www.ganas.or.jp/press/20151016po>

2つ目は1日1.90米ドル未満で暮らしている人がいるということである。この1.90米ドル未満というのは国際貧困ラインである。この国際貧困ライン未満で暮らしている人がウガンダには約1480万人いる。これは人口の約3分の1である。サブサハラ地域で見ると低いように感じるが、サブサハラ地域を除けばほとんどのところが10%以下で多いところでも20%以下である。そのため3分の1というのはとても高い貧困率であることが分かる。

3つ目は就職難である。ウガンダは日本と反対に人口が増え続けており平均年齢は10代である。それも就職が難しいという話を聞いた。マケレレ大学は日本でいう東大という話を聞いたが、マケレレ大学を卒業しても就職できない人がたくさんいると聞いた。日本では求人倍率が約1.5倍であり高卒でも何かしらの就職先は確保されている。まして東大卒なら大手企業にだって就職できる。もし、世界中のどこ

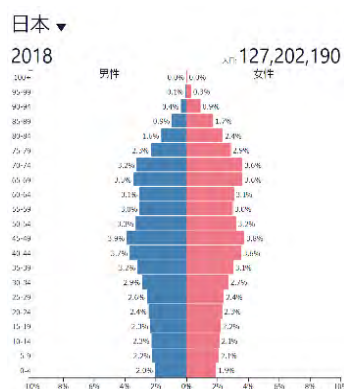


図 日本の人口ピラミッド
<https://www.populationpyramid.net/ja/日本/>

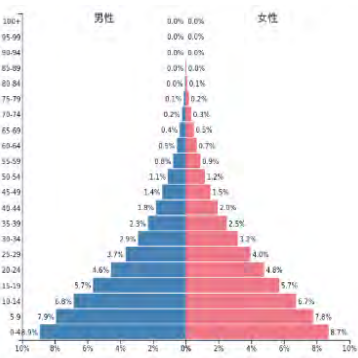
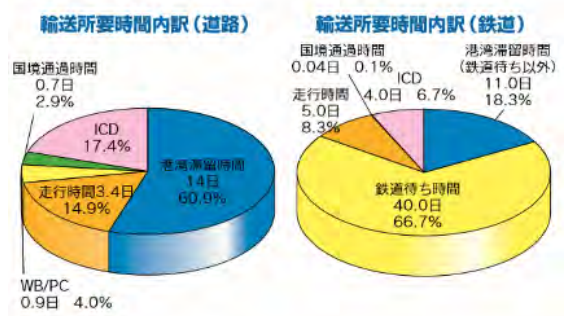
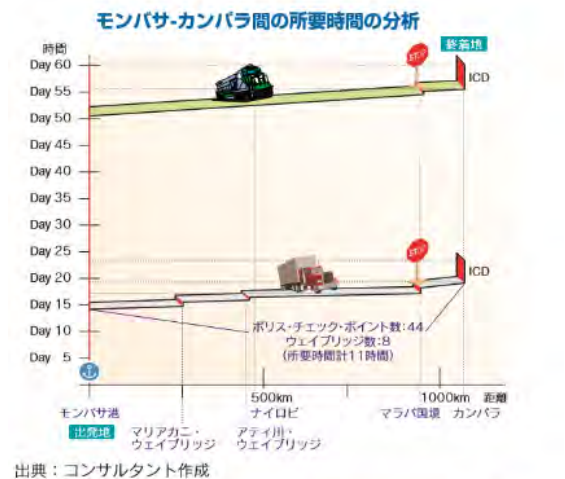


図 ウガンダの人口ピラミッド
<https://www.populationpyramid.net/ja/ウガンダ/2018/>

でも同じ条件で就職出来たら知識もあるし、いい職業に就けるだろうなと思った。一方で日本人はそうなったとき本当に知識のある人たちに負けそうだなと思った。また、この就職難が貧困を生むんだろうなと感じた。就職率が上がったなら国際貧困ライン未満で暮らす人の人口はぐっと下がると思う。

これらの問題を解決するために必要だと思ったことは、雇用の増大と単価を上げることである。若い人が多く働き手が多いというのは、国が成長するのに有利だと思ったのにそれを最大限に生かせていないのはもったいないと思った。もし、もっとたくさん就職先があれば国の GDP は上がり貧困も減るのではないか。また、農作物は1つ1つがとても安い。もっと高く売ることができたら第一次産業の生み出す GDP は上がり、現在所得の少ない農家さんの収入も上がるのではないか。では、どのように雇を増大させ物の単価を上げればいいのか。私は貿易をもっと盛んにすることが大切だと考える。ウガンダはアフリカでは珍しく、ビクトリア湖のおかげで水が豊富にあるため農作物を育てることが出来る。また、もともと金や銀などといった資源も多い。このようにウガンダは土地のポテンシャルが高い。そのため貿易においてもポテンシャルが高いのではないかと思った。実際、私はウガンダに滞在しているとき、ウガンダの農作物は物価が安く、日本では取れないものが多いだったので、もし輸送にお金がかからなかったら、日本とか色々な国でもっと高くたくさん買われるだろうなと思ったことが何度かあった。例えば、パイナップルである。日本はなかなかパイナップルが取れないため値段が高いが需要はある。一方でウガンダではたくさんパイナップルがあり大量に安く売られている。もし輸送にお金がかからなかったら日本では3倍以上の値段で売れ、パイナップルを育てている人の収入も増えて日本人も今まで以上に安くおいしいパイナップルを手に入れられてお互いにとってプラスなのにと考えた。貿易を盛んにすることで考えられるメリットとしては GDP の向上、外貨を手に入れることが出来る、雇用が生まれる、といったことが考えられる。しかし、ウガンダが貿易を行うには2つ問題があると私は思う。一つ目はウガンダが内陸国であるため輸送コストが高いということ。二つ目は、ウガンダは1次産業が中心のため長い輸送時間に耐えられないものが多いということである。

現在輸入、輸出にどの程度お金がかかっているのだろうか。物の値段のうち平均して鉄道では48.8%、陸路では68.3%がケニアのモンバサ港とカンバラ間の輸送コストであるというデータがあった。この費用をおさえることができたら、輸入品がもっと安く消費者のもとに届き、また安く輸出することでもっと多くの需要が生まれたくさん物売ることができ収入の向上につながると私は思う。その中でも私は今回鉄道に注目した。なぜなら現在、鉄道のほうが道路での輸送に比べ半分の値段で輸送ができているからだ。また、今は鉄道の方が時間がかかっているが、鉄道の整備を行いもっとスピードが出せるようになれば鉄道の方が早くたくさんの荷物が運べるようになるポテンシャルを秘めていると思う。鉄道を使う問題としては、現在も鉄道はあるがまともに機能していないことだ。軌道確保のため平均して時速10km程度しか出せない。また、容量不足により鉄道積み込み待ち時間が長く港に40日間停滞することもある。そのため現在鉄道輸送にはモンバサ港とカンバラ間で約60日かかっている。このような問題が解決すれば今まで以上に早く安くたくさんもの

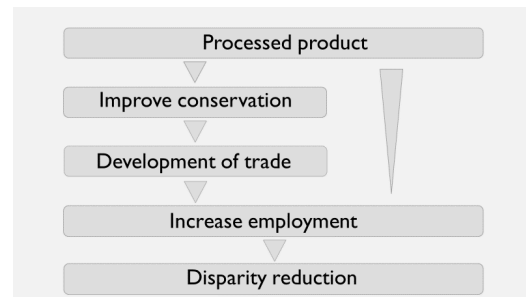


<https://www.jica.gov.jp/activities/issues 1>

を輸入、輸出できるのではないか。しかし鉄道の民営化がすすめられているため鉄道の整備が厳しいことも事実である。そのため政府も補助金を出すなどといった支援を行い、官民連携をするべきだと感じた。

4. 解決策の提案2

今回発表はしなかったが輸出するものについてもプレゼンを作るうえで考えた。なぜなら輸出する品目としては、長い輸送時間に耐えられるものでないといけない。しかし、ウガンダは一次産業が中心のため保存がそんなにきかない農作物の生産が多い。そこで私は何を輸出すればいいのか、海外で需要がありウガンダで生産され保存がきくものがあるのか疑問に思った。現在ウガンダが輸出している

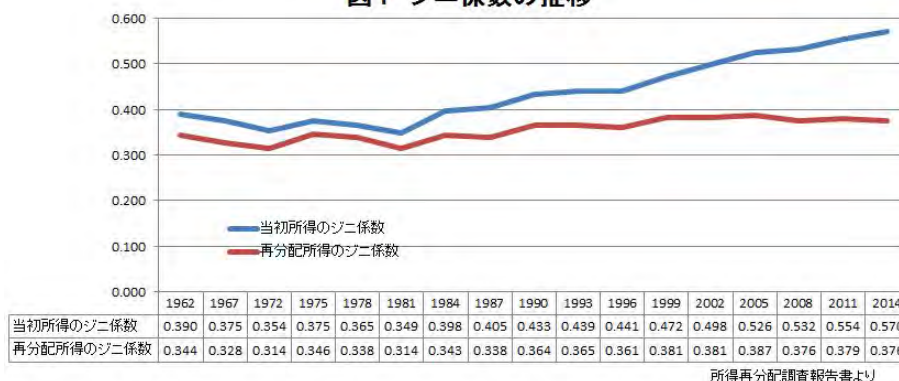


主な品目はコーヒー豆や乾燥させた魚、カカオである。でもこれだけでは限りがある。私が輸出に提案したいのはお米と加工品である。お米は現在パキスタンなど外国から輸入をしている状態で自国の分も賄えていない。しかしお米は周辺国でも不足しており需要が高い。また、粳の状態置いておけばお米は長期保存をすることができる。お米は庭先でも栽培可能で、バナナなどを植えてできる隙間でも栽培できるという話を聞いた。もっと今まで以上に収量をあげることは可能であると私は思った。ウガンダにはお米が育つ環境があるので今以上にお米の生産を増やし国の分のお米を賄えるようになったら周辺国へ輸出すればいいと思う。しかし、アジアはお米を自分の国で育てることができるため輸入をする必要がない。そこで提案するのがジャムやドライフルーツといった加工品である。先に記述したように私はパイナップルに魅力を感じた。パイナップルのような南国のフルーツは日本のような場所では採れない。そういった国をターゲットに南国フルーツを使った加工品を輸出するのがいいと思った。ジャムやドライフルーツにすることで普通に果物をそのまま売るよりも高く売れる。また、加工品にすることで商品のサイズも小さくなり輸送コストも減らすことができる。何より加工することで保存性が上がり、長い輸送時間に耐えられるものとなる。例えば瓶詰めジャムの場合、高糖度のものなら2年ほどもつといわれている。また一次産業で終わらすのではなく、二次産業、三次産業へと発展させることで雇用も生まれる。就職難の解決や、GDPの向上にもつながるのではないか。最初に述べたように、農業従事者は人口の70%を超えるのに農業の占めるGDPが24%しかない。つまり農家さんの生み出すお金は一人当たりとても少なく、2次産業や3次産業の生み出すGDPが高いことになる。私はこの2次産業や3次産業をもっと発展させることで国のGDPが上がると思った。

5. 日本とウガンダの経済格差

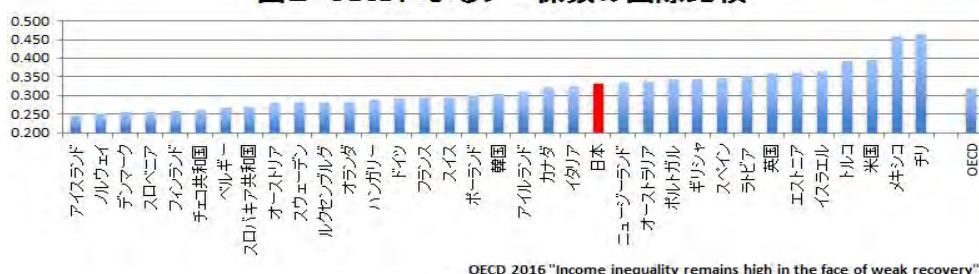
今回、ウガンダの経済の今日を調べる際、日本についても調べてみた。すると日本の経済にも問題があるということが分かった。一番驚いたのは格差がでかいことだ。日本のジニ係数は0.335であった。ウガンダは0.376で日本よりも悪かったが正直ウガンダより日本のジニ係数にショックを受けた。なぜなら、就職難で1日に1.90米ドル未満で暮らしている人がたくさんいるとか、都会と田舎で収入が2倍違うとか、政府がいっぱいお金を持っているとか習ったウガンダと、あまりジニ係数が変わらないからだ。確かに日本にはとびぬけたお金持ちがいる。そういう人がジニ係数を引き上げているだけなのか。それとも貧困で困っている人がいるのか。日本の現状が気になったので少し調べてみた。すると驚いたことに日本のジニ係数は右肩上がりであった。しかし再配分所得は0.4を超えないようにキープしている。税金や社会保障が大きな役割をしていることが分かった。

図1 ジニ係数の推移



https://www.es-inc.jp/graphs/2017/grh_id 2

図2 OECDによるジニ係数の国際比較



https://www.es-inc.jp/graphs/2017/grh_id 1

一方で日本のジニ係数は OECD 平均よりも高い。つまり先進国の中では格差が大きいほうである。このグラフを見ると北欧のジニ係数が低く、アメリカが高い。つまりこのグラフからも税金や社会保障が格差を減らすのにどれほど重要かが分かる。社会保障や税金の仕組みが整っている北欧はジニ係数が 0.25 にもいっていないのに対し、政府が個人にあまり干渉せず国として行う保険制度などが乏しいアメリカではジニ係数が 4.0 近い。また、日本ではひとり親世帯を中心に相対的貧困の中で生活をしている人が多くいることが分かった。なんと、ひとり親世帯の貧困率は OECD 加盟国でワースト 1 位である。私はもっと社会保障の仕組みがしっかりする必要があると感じた。それはウガンダに対しても同じである。ムバララ病院に行った際、ウガンダの保険の仕組みについて尋ねてみた。すると国の保険制度はなく個人で保険に入っている。しかし、国立の病院は無料であると言っておられた。最初は病院が無料なら貧しい人でも行けるしいいじゃんと思っていた。しかし、病院を見学し話を聞いていると問題点も見えてきた。一つ目は、国立病院は診察が無料なためたくさん人がやってくる。人がたくさん来るため医師や看護師が不足し診察の待ち時間が長くなってしまふ。また、人が多いためベッドが不足し床で寝ないといけない妊婦さんがいたり、ベッドが近いために院内感染が起りやすかったりする。病気で苦しんでいるのに長い待ち時間に耐えなければならなかったり、産後すぐに退院させられてしまったり、病院に治療に来ているはずなのに逆に感染症にかかってしまうのは問題だと思う。お金を持っている人は私立病院に行けるため待ち時間が短く入院環境も整っている。お金を払っているのだから当然なのかもしれないが、お金がない人たちにもそのような整った医療環境が与えられるべきだと思った。二つ目は国からの支給が少ないため薬やガーゼなどはなくなったら町の薬局で買わないといけないことである。国からの物資が不足すれば自分で買わないといけないというのは、お金がない人たちに不利だと思った。日本の無料定額診療のようにお金がある人は医療費を払い、金銭的弱者の人たちが優先して無料で診てもらえる仕組みのほうがいいのではないかと思った。国立病院は診察が無料というのは最初魅力的に感じたが、考えてみるとお金がある人も無料で診

てもらえるかわりに、本当にお金がない人が薬などを手に入れられないこともある。そう考えると日本のような仕組みのほうがいいのではないかと感じるようになった。

6. ウガンダに見習うべきだと思ったこと

今回ウガンダに行って、日本もウガンダに見習うべきだと思ったことがある。それはジェンダーに対してである。ウガンダにはジェンダー大臣のような人がおり、レディースデーもあると聞いた。日本は男女格差をあまり感じる機会はないが先進国の中で圧倒的に下位にあり、世界経済フォーラムによると2018年には149か国中110位となっている。ウガンダも賃金格差など男女格差が残っているがその問題を解決しようとしている。日本にも男女格差をなくすための法律は存在するがまだまだ政治などリーダー的な役割は男性が多いように感じる。ウガンダを見習ってジェンダー大臣のようなものを設け、もっと男女格差是正をやっていくべきだと思った。

7. エコスマートを訪問して

私が今回訪問した場所で一番すごいなと思った企業はエコスマートだ。エコスマートは、サトウキビを絞りジュースを抜いて出た残渣の繊維を使って生理用品を作っている企業だ。ウガンダでは生理用品がとても高くてなかなか買えない。そのため恥ずかしくて学校へ行けずドロップアウトしてしまう子がいる。また、生理用品の代わりに使い古した布の切れ端や植物の葉を使い、深刻な感染症にかかっている人もいる。そういう人たちに低価格で生理用品を提供できるというのは、とても国の将来のためにもいいことだと思った。また、サトウキビの繊維を使うことで自然にやさしく再生可能なものが作れている。物が十分にありお金もある日本も見習う必要があるのではないかと感じた。エコスマートの人に問題点を尋ねると、機械が人の手を使うため時間がかかり1日に60枚しか作れないこと、サトウキビを400km離れた場所から運んでくるため輸送コストが高いこと、ウガンダ政府からの金銭面での援助が少なく、ほかの企業との契約期間も終わってしまうため資金調達が困難なことをあげていた。1つ目の時間がかかるという問題は、日本の技術で何とかかなりそうだと感じた。2つ目の輸送コストの問題は、近くに自分たちでサトウキビ畑を作ったらいいと思った。初期費用が掛かるため現実的に考えると厳しいかもしれないが、自分たちで畑を持つことで砂糖を作るジュースも収穫でき、別の収入も入ることになるので、長い目で見ればいいと思った。3つ目の金銭的な問題は、クラウドファンディングしたらいいと思った。私はこの企業の説明を受けてとてもいいことをしていると思ったし、もっと広まるべきだと感じた。今は学生でお金がないから支援することはできないが、もしお金があったなら、是非支援をしたいと思った。きっとそう思う人は他にもたくさんいると思う。クラウドファンディングを行うことで金銭面の支援を受けられるだけでなく、この活動も知ってもらえる。活動が知ってもらえることでもっと世界的にこの活動が広がり、大きな企業からも援助を受けられる可能性があると思った。もうすぐ契約期間が終わってしまうため活動を続けられるかわからないと言っておられたが、もし本当に活動が終わってしまったらもったいないと思う。ぜひ、どうか資金調達を行って、活動を続け大きな企業になってこの活動を世界的に広げてほしいと思った。



8. プログラムを通して

今回のプログラムに参加して自分自身成長したなと思うことがある。それは、人前で話すこと

に対する抵抗が減ったことだ。私はもともと人見知りで大学に入った時も自分からはなかなか話しかけられないし相手に話しかけてもらっても「うん」とかしか答えられずなかなか友達ができなかった。そのため今回も TA さんたちと話せるか行く前から一番の心配事だった。しかし、TA さんがフレンドリーだったこともあり 1 週間もすれば苦手な英語で自分からコミュニケーションをとるようになっていた。もちろん伝えたいことがなかなか伝えられなかったり相手が行っていることが聞き取れなかったり悔しい思いは何度かした。しかし、相手が頑張って理解しようとしてくれたのがとてもうれしかった。この経験が、もっと英語を話せるようになりたいという、日本に帰ってからの英語の勉強に対するモチベーションにつながっている。また今回のプログラムに参加する上で自分の中で目標を決めていた。それは 1 つの機関または 1 つの授業でそれぞれ一回は質問をするということである。人と話すことさえ避けてきた私は人前で質問することなんて今までほとんどなかった。



まして人前で苦手な英語で質問するなんて考えられなかった。しかし今回、半強制的にでも質問をすることで気になっていたことが知れたのは事実だし、英語が分からなくて知っている単語を並べただけの質問にも、頑張って理解して答えようとしてくれる人ばかりでうれしい気持ちになった。また TA さんは疑問に思ったことに対してすぐに質問をされていて、海外ではこれが普通で、質問をなかなかしない日本人のほうが変わっているのかもしれないと改めて感じた。質問をすることで分からなかったことが分かるようになるだけでなく、お話をしてくださった人に対して、しっかりと話を聞いていたアピールにもなりいい関係を築くのに大切なことだと感じた。今回の経験で質問をすることに対するハードルは下がり、人前で英語を話すことに対する抵抗もなくなった。また、質問をするメリットも新たに見つけることができた。今後の課題としては、あまり質問をしない環境の日本でも疑問に思ったことは質問すること、もっと英語を頑張って国の異なる人とのコミュニケーションを円滑に行えるようになることだ。そのためにも英語の勉強を今まで以上に頑張りたいと思う。今までは文法問題みたいにテストに向けた勉強しかやってなかったが、今後は話す練習や聞く練習をもっとしていきたいと思う。

ウガンダで聞いた話でとても印象的で素敵だと思ったことがある。それは、タンザニアやコンゴからの難民に対しての対応である。ムバララの病院に行った際、国境からコンゴ難民がたくさんやってくるという話を聞いた。ムバララ病院では医師や看護師のため診察の待ち時間が長かったり、ベッド数が不足しているため床で寝ないといけない妊婦さんがいたりするという話を聞いた。それなのに国民と同じように難民を受け入れて国民から文句とか出ないのか疑問に思った。私は日本という島国に住んでいるので難民が自国に入ってくることにに対して何もわからないが、欧米で難民排除の動きがあるなかウガンダではどうなのか気になって質問してみた。すると意外なことに、文句は今まで聞いたことがないという回答であった。さらに驚いたことに、難民キャンプで病気になった人を病院まで連れてきて送るシステムや、難民キャンプで働く人を育てる仕組みまであると言っておられた。詳しく聞いてみると、もともと国境は自分たちが引いたものではないためウガンダ人、コンゴ人という概念があまりなく、みんな平等という考えなのだと聞いた。病院のスタッフもいろいろな部族出身でコンゴと同じ部族出身の人もいると言っておられた。私はこの話を聞いてとても温かい気持ちになった。日本のテレビでは欧米の難民排除のことばかりなので、こういう難民に対する考えもあるということをもっと広めてほしいと思った。

今回のプログラムを通して、百聞は一見にしかず、という言葉があるが本当にそうだなと思った。今までアフリカをひとまとまりにして考えていた。アフリカといえば赤土に貧困で困っている人たちが多く、子供たちは学校へ行けていないみたいなイメージを抱いていた。しかし実際はとてもきれいな街並みでおしゃれなカフェやきれいなモールもあり、出会った人たちは私よりも

はるかに知識を持っていた。アフリカを1つとして考えていた私はもちろんウガンダも1つとして考えていた。カンパラだけ見て「あ、ウガンダって発展しているんだ」と思っていた。授業で格差があるということを知っても「へー」としか思っ



ていなかったが、実際にカンパラ以外の場所に行くと水くみへ行く男の子や昔ながらの家、地べたで寝ている人がいて格差を感じた。授業の時は格差に関してはあまり何も思っていなかったが、実際に見たことで、どうやったら格差をなくすことができるのか知りたいと思えた。話を聞くだけではなく実際に見ることで、同じ問題に対して全然違う深刻さで考えるようになった。この経験を通して私は大学生のうちにもっとたくさんの日本とは異なる環境の場所を見て、もっと視野を広げる必要があると感じた。ウガンダは私が本で読んで抱いていたアフリカのイメージとは違い発展していた。私は今まで、国際協力をしている人のトークイベントに参加したり、本を読んだりして、途上国ではこんなことで困っている人がいるから将来はそういう人たちをこういうふうに支援したいと思っていた。しかし、今回実際に自分で見ることの大切さを学んだので、人の話を聞いたり本で読んだりしたことだけで将来どういったことがしたいかを決めるのではなく、もっといろんな場所を実際に見て私が本当にしたいことは何なのかを考えて将来を決めていきたいと思うようになった。今後の目標としては、途上国を尋ね、その人たちが本当に必要としていることは何かを考え、将来自分ができるところを見つけることだ。そのためにも、もっと語学力をつけたいと思う。そして将来は、途上国で地元の人に寄り添った支援をしていきたいと思う。現地の人とお互い信頼しあえる関係を築き、貧困を少しでも減らすお手伝いが出来たらいいと思う。今回の研修を通して少し将来のことを考えられたことはとても良かったと思う。今回このプログラムに参加した理由を最初に書いたが、自分の将来を考え、視野も広がったと思うので、今回プログラムに参加した目的は個人的に達成できたと思う。

私はウガンダに来てウガンダという国がとても大好きになった。陽気でやさしい人たち、きれいな自然、おいしいごはん、ウガンダで出会ったすべての人やものが本当に素敵で、この国が大好きになった。ウガンダに行く前、コロナウイルスで日本人が海外で暴行を受けたというニュースを見たりしてとても不安だった。しかしこんな時でも出会った人たちはみんな暖かくて、何も気にせずに滞在することができた。本当にやさしい人が多いんだろうなと感じた。ごはんも行く前は心配だった。友達や親に絶対に痩せて帰ってくると言って日本を出たのに、ごはんが予想外においしくてまったく痩せなかった。ホテルもとてもきれいでスタッフもやさしく快適に過ごすことができた。行く前はウガンダに対するイメージがあまりいいものではなかった。友達にウガンダに行くといっても、「え、ごはんに虫とか出てきそう」とか「変な病気ならんように気を付けて」とか言われた。でも、実際に行くととても素敵な国だったからもっといろんな人に知ってもらいたいと思った。アフリカと聞くだけでなんか危なそう、とか思って私の友達のような反応をする人はたくさんいると思う。私はそういう人にウガンダって自然がきれいでごはんがおいしくて、人もやさしくて、とっても素敵な国なんだよってことを知ってもらいたい。どうしたら知ってもらえるかわからないけれど、私は周りの人たちにお勧めしたいと思う。帰ってきて友達に「ウガンダどうだった？」とよく聞かれる。私は満面の笑みで「楽しかった。本当にお勧め！めっちゃきれいでいい国、人もやさしくてごはんもおいしいよ！」と伝えている。本当にそれくらい素敵な国で大好きな国だ。また行く機会があればぜひ行きたいと思う。今回このプログラムに参加できてよかったと思う。

ウガンダ海外実践教育プログラムを通して

農学部生命環境農学科 1 年

北川 千晴

目次

1. このプログラムに参加した理由、行く前のウガンダのイメージ
2. ウガンダの農業
3. ウガンダの医療
4. 教育の大切さ
5. ウガンダの教育における現状
6. 退学におけるウガンダの背景
- 7～9. 私の解決策(プロジェクトについて)
10. このプロジェクトを通して
11. なぜこのプロジェクトを考えたのか
12. ウガンダの子供達の夢
13. 実際にウガンダで生活してみても
14. 私たちにできること
15. この研修で私が得たもの

1. このプログラムに参加した理由、行く前のウガンダのイメージ

私は、国際協力に興味があった。しかし、JICA などの取り組みをインターネットで見ているだけで、実際に活動を行っているアフリカなどの現在の状況などを知らなかったので、実際に自分の目で見てみたいと思った。また、アフリカは今までに行ったことがなかったので、純粋にアフリカに行きたいという気持ちも強かった。また、このプログラムを知るまではウガンダという国すら聞いたこともなかった。ざっくりとした私のアフリカに対するイメージとして、「大自然、貧困、乾燥、民族、植民地」などといった言葉が浮かんだ。実際に本を読んでみると、ウガンダは HIV の患者が日本よりもはるかに多く、医療が整っていないということ、子供の退学率が高い、ということが特に印象に残った。

2. ウガンダの農業

ウガンダは国民の約 80%が農業に携わっており、そのほとんどが小規模農家だ。現在、ウガンダでは米の需要が高まっており、生産が追いつかず米を輸入している。農業機械を導入したくても導入できない農家が多いため、機械をなるべく使わないようにして米の生産率を上げることが、今のウガンダの農業での課題だ。横の写真は実際に JICA が考案した、機械を使わずに米を脱穀する方法である。簡単な材料で誰でも作れるので、とても良いアイデアだと思った。今のウガンダでは米は比較的高い値段で売れるので、米農家は割と安定した収入を得ることができるようだ。しかし、将来的に関税が撤廃されて海外から安い米が入り、米の需要が低くなったら、米農家の収入は少なくなるだろう。現在は例えばフェアトレードのような農作物を適切な価格で取引されるような規



制はない。将来を見据えて、農家が安定した収入を得られるような政策が必要だと思う。また、ウガンダの農家にとって米は食用ではなく換金作物であるので、米の栽培に対してのモチベーションが低いことも課題として挙げられる。

3. ウガンダの医療

ウガンダでは、まだまだ全ての国民に医療が行き届いていないのが現状だ。実際にムバララ病院では、ベッドの数が足りないがために床で寝ている患者の姿が多く見られた。さらに、国からのお金で運営しているので診察料はかからないが、薬がなくなったら患者さんに買ってもらうなければならない。他にも、マラリアやエボラ出血熱といったアフリカ特有の病気も多くある。また、乳児の死亡率が日本に比べると高いことも課題である。主な要因として、妊婦や新生児のケアや知識の少なさが挙げられる。日本では珍しいような病気も多く、ウガンダの衛生環境の悪さが現在問題視されている。カンパラでは比較的水道が整備されているように感じたが、道端にはゴミが沢山落ちており、スラム街にはゴミの山と生活する人々の様子がうかがえた。首都でそのような状況であるので、地方ではさらに衛生的な環境で暮らすことが難しい人が多いだろう。少しでも病気にかかる人を減らすには、インフラの整備や衛生に関する教育を強化していく必要がある。

4. 教育の大切さ

私はこのプログラムで地方の農家さんに話を聞きに行ったときに、彼らが英語を話すことができないことに衝撃を受けた。ウガンダの公用語は英語であり、ほとんどの国民が話すことができると聞いていたので、彼らは学校教育を受けていない可能性があると考えた。もし、農家が英語や読み書き、計算能力といった学校で身に付けられるスキルを持っていなかったら、農家はどれだけ良いものを育てていても、商品を市場で取引する際に不利益な立場に立たされるかもしれない。すなわち、彼らが作った作物を安い値段で売ってたたかれる可能性があるのではないかと考えた。また、子供が学校に行けるようになることは、より多くのスキルや知識を身に付けることができ、彼らの将来の選択肢の幅を少しでも広げるきっかけになると思う。

5. ウガンダの教育における現状

このように考えた私は、ウガンダに来る前に本で読んだように、ウガンダの退学率が本当に高いのか、またその原因は何なのか知りたいと思った。日本では、家庭の経済状況などに応じて奨学金が貰える制度がある。ウガンダにもこのような奨学金の制度はあるのか？と TA さんに聞いたところ、MoES(Ministry of Education & Sports)という機関が UPE(Universally Primary Education),USE(Universally Secondary Education)という取り組みを行っているそうだ。これは、

Table 3.1: Enrolment in USE Schools Visited.

Year	Gender	S.1	S.2	S.3	S.4	Actual Total	Expected	Not Promoted to Next Class
2007	Male	11,190				11,190	11,190	0.0%
	Female	8,922				8,922	8,922	0.0%
	Total	20,112				20,112	20,112	0.0%
2008	Male	11,291	10,717			22,008	22,481	2.1%
	Female	9,251	8,545			17,796	18,173	2.1%
	Total	20,542	19,262			39,804	40,654	2.1%
2009	Male	9,884	10,500	9,659		30,043	32,365	7.2%
	Female	8,333	8,382	7,714		24,429	26,506	7.8%
	Total	18,217	18,882	17,373		54,472	58,871	7.5%
2010	Male	11,344	9,137	9,272	8,485	38,238	43,709	12.5%
	Female	10,094	7,563	7,585	6,373	31,615	36,600	13.6%
	Total	21,438	16,700	16,857	14,858	69,853	80,309	13.0%
2011	Male	12,202	11,101	8,733	8,444	40,480	44,721	9.5%
	Female	10,896	9,648	7,530	6,493	34,567	38,574	10.4%
	Total	23,098	20,749	16,263	14,937	75,047	83,295	9.9%
2012	Male	11,139	10,871	9,738	7,800	39,548	44,569	11.3%
	Female	9,827	9,458	8,261	6,007	33,553	39,150	14.3%
	Total	20,966	20,329	17,999	13,807	73,101	83,719	12.7%

一人でも多くの子供を学校に行けるようにするための取り組みで、学校の授業料を無料にして、文房具などの必要なものさえ買い揃えれば誰でも学校に行けるという仕組みだ。この制度のお陰で、だんだんと子供の進学率は上昇し、近年ではほとんどの生徒が学校に入学できている。入学率は高まったものの、それに反して修了率が全体の6割ほどにとどまってい

る。横の表のように、生徒の学年が上がるにつれて、学校を退学してしまう生徒の人数が増えている。学校に入学できても、「学校に通い続ける」ことができ、さらに卒業できる人が先進国に比べてまだまだ少ないことが、現在のウガンダの教育における最も大きな問題である。

6. 退学におけるウガンダの背景

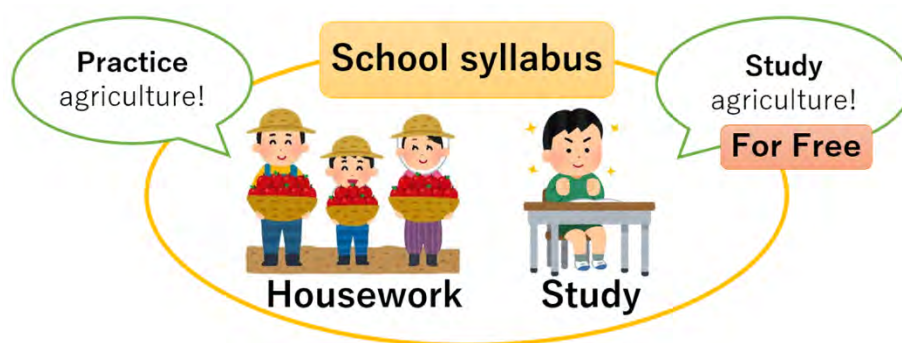
ではなぜこのような問題が起こっているのか？その原因となるウガンダの背景がいくつかある。まず、ウガンダの国民のうち、約80%が農業に携わっている。また、ウガンダの子供は、日本に比べてよく家のお手伝いをさせられる習慣がある。そのお手伝いの一つとして、農作業や家畜のお世話なども含まれる。このようなことから、もし収入が少ない農家の家庭だったら、毎日の生活のために少しでも多く作物を生産しなければならない。そうすると少しでも人手が多い方が良いので、子供も農作業に駆り出され、学校にだんだん行けなくなってしまう子も多い。

7. 私の解決策

ウガンダでは小学校から農業の授業があると聞き、私は「**Farm Class Project**」というプロジェクトを考えた。このプロジェクトの目的は、**子供が退学せずに学校に通い続けられるようにすること、貧困を解決するきっかけになること、である。**

8. Farm Class Project #1

このプロジェクトは、学校の農業の授業の一つとして、シラバスに家の手伝いである農業を組み込んでしまうというものだ。学校で農業を座学で勉強し、その実習の場として家の農作業を行う。学校が家の農作業を単位の一つとして認めることで、子供は家庭の手助けをしつつ、学校に通い続けることができる。また、家の手伝いを単なる作業にするのではなく、学習の場として扱うことで、作物の栽培方法や家畜の飼育の仕方などにより興味を持つことができ、子供達の学習のモチベーションを上げることができるのではないかと思う。家庭の状況によって学びの質を統一させることは難しいと思うが、それぞれが調べ学習としてレポートなどを提出することで、学校の学習の一つとして認めることができるのではないか。



9. Farm Class Project #2

このプロジェクトでは、学校の農業の授業で作物の栽培方法を学ぶだけでなく、その後の流通方法や加工の方法なども学ぶ。それによって、ウガンダの産業の第2次産業化、第3次産業化を促すきっかけになると考える。右のグラフのように、ウガンダの産業は現在約75%が第1次産業を占めている。ウガンダのGDPは日本などの先進国と比べてかなり低く、貧困の問題は深刻になっている。そこで、ウガンダの産業のさらなる発展が必要である。その解決策の一つとして、学校でウガンダの産業について学び、ウガンダ産の農産物を使って新たな商品を作り、それらを流通させるアイデア力を学校で養う。また、現在ウガンダは人口増加の影響もあり、働き口の不足が深刻な問題となっている。大学を卒業しても、職を得ることができる人は3~4割程となって

おり、やむ負えなく生きていくために農家になる人も多い。実際に Kennedy Secondary School の先生も「生徒たちが生きていけるように農業を授業で教えている」と言っていた。このような働き口不足の問題を解決するためにも、第2次産業、第3次産業を発展させることは、職を増やすことにもつながる。学校で学ぶことは直接的に職を増やすことにはならないが、将来的に職を増やすきっかけになるのではないか。



10. このプロジェクトを通して

子供には学校に行き続けて勉強する権利があると思う。だから、私は効率的にお金をかけず、学校に通い続けられるシステムが必要だと考えた。そして、学校で農業の先の産業のことについて学ぶことで、子供達は少しでも将来の仕事やウガンダの経済などについて考える機会を得ることができる。教育の発達には貧困を解決するきっかけになると思う。一つでも多くのスキルを学校で身につけて、人々の生活の質を上げることで、その人の将来の選択肢を少しでも広げることができるのではないか。

11. なぜこのプロジェクトを考えたのか

以上の4～10のトピックが私のプレゼンの内容であるが、私がなぜこのプロジェクトを考えたのかについて述べたい。私は、ウガンダで様々な場所を訪れ、一つ疑問に思ったことがある。JICAで行った地方の農家の方のところや、ムバララ病院などでも共通して現場の方は同じことを言っていた。それは、「政府からお金をもらえない。」ということだ。そして私は「それではウガンダ政府はどこにお金を使っているのか？それとも、医療などの国民が生きていくうえで必要なことにすらお金を回す余裕がないのか？」と強く感じた。ウガンダの輸出のほとんどが農作物であり、それに携わる国民も多いはずなのに、お金が割かれぬ。また、医療も国民が健康に生きるためには欠かせないはずである。しかし金銭的に十分でないということは、ウガンダは物の輸入にお金をかけてしまっている、輸入に頼らざるを得ない現状になってしまっているからなのではないかと考えた。ウガンダの道を走る車は日本車が多く、道や水道の工事を行っているのは中国の企業である。まだまだ発展途上国であるので、ウガンダだけの力で補い切れぬ部分が多く、国の発展を優先した結果、今のような状態になってしまっているのではないかと考えた。そこで、ウガンダが今のまま発展し、その国を支える国民の生活をより充実したものにさせるには、「**今ある制度の改革**」が必要なのではないかと思った。ウガンダの現在の制度を見直し、今ある問題点をなるべくお金をかけない方法で解決できることが必要だと思った。例えば、私のテーマの教育なら、「貧しい子供達のために学校を建てる」という案があるとする。しかし、その学校を建てるためのお金はどこから得るのか？きっとウガンダ政府も問題を解決したいのは山々のだろうが、それに充てられる十分なお金が無いのが現状だろう。それに他国からの支援で解決するとすると、ウガンダの人だけで継続するのが難しくなる可能性があり、何よりお金がかかるということは、いくつ

も同じことを実践することができないということだろう。上記のように、もし学校を建てたとしても、ある特定の地域しかその問題を解決できないし、ウガンダ全体で行うとしたらさらに学校を建てる必要があり、さらにお金が必要となってしまう。一方で新たなシステムを作り、制度を変えるだけなら、国全体にも反映しやすいのではないか。だから私は、ウガンダの今ある制度を変えることで少しでも国が豊かになったらいいなと思い、今回の「Farm Class Project」を企画した。

12. ウガンダの子供達の夢

Kennedy Secondary School へ訪問した際、私は何人かの子供達に将来何になりたいのかを聞いてみた。私が聞いた子たちは中学生が多く、専門医、外科医、キャビンアテンダントなどといった答えが返ってきた。特に医療関係の仕事に就きたいと言ってくれた子が多かった。理由は人それぞれだったが、ウガンダはまだまだ医療従事者が少ないうえに、発展していないので医療に貢献したいという子もいた。また、キャビンアテンダントになりたいと言ってくれた子は、映画に憧れてなりたいたいと思ったそうだ。彼女にぜひキャビンアテンダントになって日本に来てねと言うと、笑顔で「もちろん！」と答えてくれた。この子たちが学校を卒業して希望通りの職に就けるように、ウガンダが少しでもよりよい国になって欲しいと心から思った。



13. 実際にウガンダで生活してみて

約3週間ウガンダで生活してみて、私のアフリカに対するイメージは大きく変わった。これまでは「貧困」という言葉からどうしても暗いイメージを持っていたが、人々は全くそんな様子ではなく、ウガンダの人はとても明るくて優しい人たちだと感じた。私たちはバスの中からよく道行く人に手を振っていたが、ほとんどの人が笑顔で返してくれた。

また、ムバララ病院で隔離病棟の見学をさせてもらったとき、「去年の夏にエボラ出血熱がコンゴで流行したが、隣国から感染者が病院に来ることに對して差別は生まれぬのか」という話で、「もともとウガンダやコンゴの国境はヨーロッパ諸国に引かれたものなので、国は違っても同じ民族である。病院で働く人も様々な民族出身なので、差別の意識は生まれぬし、お互いに助け合っている。」と病院の方が言っておられたことがとても印象に残っている。今までの私のイメージでは、隣国同士国境近くで紛争が起こっているものだと思っていたが、この話を聞いて一気にイメージが覆された。もちろんアフリカ諸国すべてがそうではないと思うが、今までの怖いイメージがある一方で、国は違っても民族同士助け合っているところもあることが素敵だと思った。また、元々植民地だったという日本にはない歴史的背景も強く感じることができ、ウガンダに来てとても良かったと思えた。

さらに、ウガンダの人々はまじめで勤勉な人が多いと感じた。今まで聞いていたアフリカの人々のイメージでは、集合時間に来ないといった話を聞くことが多くルーズな印象があったが、私が関わったウガンダの人々はとても勉強熱心な人が多いと感じた。TAさんも、「今は学部で農業を勉強しているけど、大学院に行ったら経済を勉強したい。そして、子供達のための学校を建てる

ことが夢なんだ。」と話してくれた。Kennedy Secondary School で出会った高校3年生の女の子も「大学に行って勉強したい」と話してくれ、勉強熱心な人が多い印象を受け、私も見習いたいと思った。今まで私はアフリカの国のことを全く知らなかった。それに、アジアの国だって日本や中国、韓国などそれぞれ違う文化を持つ国なのに、アフリカでまとめて考えて同じイメージを持ってしまっていたと感じた。そして、ウガンダ以外のアフリカ諸国についても知りたいと思った。もちろん紛争があったりとよく言われているイメージのような国もあるかもしれないが、少なくともウガンダは私たちが思っていたほど怖くはないし、素敵な人に沢山出会えた。しかし、私たちはほとんど都市部に滞在しており、私たちが関わったのは、良くない言い方だがウガンダの中でも比較的所得がある人たちだった。南スーダンからの難民が多いウガンダ北部や、地方やスラムに住む人はもっと違う意見や考えを持つ人たちなのかもしれない。今回の研修だけでウガンダの全てを知ったつもりになってはいけなくて強く感じた。

14. 私たちにできること

私がウガンダに来る前、祖父母にアフリカにあるウガンダという国へ行くって行くという話をした際、祖父母の反応はそんなに良くなかった。そして、現代では差別用語であるが「黒ん坊」という言葉も彼らの口から出た。お年寄りなのでステレオタイプな考え方を持っていることは仕方のないことだと思うが、私たち日本人は発展途上国というだけで、どこか心の中でアフリカの人たちを自分たちよりも下に見てしまっていることがあるのではないかとこの違和感を持った。これはお年寄りに限らず、私たちの世代でも勝手な偏見とイメージだけでアフリカの国や人々を判断してしまっているのではないかと。同じ人間であるのに生きる場所や肌の色、文化が違うだけでその人たちを勝手に判断してしまうような人間に私はなりたくない。そして、多くの外国人が日本でますます働くようになってきている今、私たち日本人はそのような考え方を捨てなければならぬと思う。しかし、ニュースなどでは基本的に悪い話や事件しか報道されないため勝手なイメージを持ってしまう。「正しい現状を知らない」ということが今の私たちの大きな弊害になっているのではないかと。そこで、実際にアフリカの国、ウガンダに行った私たちが良い面も悪い面もウガンダのリアルを身の周りの人に伝えていかないといけないと強く感じた。そして、さらにこの研修でより正しい情報の必要性を感じたことがある。今世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスだ。上記で述べたように、ウガンダの人は優しい人が多かった。しかし、中には私たちがバスに乗っているとこちらを指さして「コロナウイルス！」と叫ばれたことも何度もあった。嫌な気持ちにはなるが、当時まだ感染者が出ていないウガンダに、中国人なのか日本人なのか韓国人なのか見分けもつかないアジア人が団体でいることに怖さを持たれても仕方がないと思った。それに、私たちが日本を出国する際、ドバイでの乗り換えでは何も新型コロナウイルスに対する検査はなかった。また、ウガンダに入国する際も全員が熱を測られ、個人情報を探られたのみで、私たちがウイルスを100%持ってないと言い切れる状態ではないまま入国できてしまったことに「本当にいいのか？」とってしまった。また、これは私の勝手な予想であるが、アフリカにはマラリアやエボラ出血熱などといった比較的致死率の高い感染症があるため、今回の新型コロナウイルスに対しても恐怖心が大きいのではないかと感じた。また、このような事態になる前からウガンダに滞在している青年海外協力隊員の方も「道を歩いていたらコロナウイルスと言われる。」とおっしゃっていた。未知のウイルスに全世界の人が苦しむ中、新たな差別や感染者を生まないようにするためにも、全員が正しい情報と知識を持つことが大切だと改めて感じた。

15. この研修で私が得たもの

マケレレ大学でウガンダの歴史や政治、経済などについての授業を受けたとき、先生やTAさんに、「日本にはどんな政党があるの？」「日本の歴代の総理大臣は誰？」「ウガンダに比べて日本のGDPはどれくらいなの？」などという質問をされたが、私は何一つ答えることができず、自分の無知さに驚いた。ウガンダの若者は自分の国のことをよく知っており、上記でも述べたよう

に「この国を何とかしたい！」という思いから勉強熱心な人が多かった。発展途上国で、様々な問題を抱えている現状がさらにそう思われる要因ではないのかと思う。一方で、私たち日本人はとても恵まれており、私たち学生のうちのほとんどが特に不自由なくこれまで生活してきている。恵まれすぎている国で生きているからこそ、自分の国に対する関心が薄く、若者の選挙の投票率が低いこともその結果として現れているものの一つではないだろうか。今まで私は海外にもっと出たいし、海外のことをもっと学びたいと思っていたし、今もその気持ちは変わらないが、まず日本のことをもっと知ってから世界に出るべきだと強く感じた。毎日 SNS や YouTube ばかりを見ている中身の無い人間にはなりたくないと思った。もっと自分の国に関心を持ち、政治や経済をさらに勉強したいと思う。

そして、他にも印象深かったこととして、ウガンダでは国内の「差」がはっきりとわかることだ。例えば、首都のカンパラの都市部に住む人は電気や水道が整備された生活で、スマートフォンを持っている。しかし、国立公園の帰りに見た昔ながらの家に住む人たちはおそらく、電気や清潔な水を得ることができないだろうし、学校や病院といった施設へのアクセスも悪いと思う。さらに、北部の難民の方の生活は想像することすらできない。このように、ウガンダ国内のなかでもこんなにも顕著に格差を目にすることができた。一方で日本はどうだろうか？と考えたとき、わからないというのが正直な感想だ。ウガンダほどではないだろうが、日本も先進国なりに問題を抱えているはずだし、社会的に弱い立場になってしまっている人たちは少なからずいるはずである。でも、日本での「差」はあまり知られていないし、今まで私たちは知ろうともしてこなかった。この研修を通して私は、海外だけでなく、日本国内にもより広い視野を持つことができた。また、私は国際協力や起業といったことに興味があるが、今回の研修を通して実際にそれらがどのようなプロセスで行われているのかを知ることができた。例えば青年海外協力隊員として問題を解決するためのプロジェクトを何か考える際にも、一つの問題だけではなく周囲の環境などのさまざまな要因や背景を考慮しながら進めていくことが大切だと知った。また、私たちが訪問させていただいたクリニックマスターやエコスマートといったウガンダのベンチャー企業も、もともとはこの国にある問題を解決したいという思いから行われていた。だから、私が興味のある国際協力などに近い仕事に将来就けるようになるためにも、今後の生活では、多くのことに興味を持ち、国内外問わず世界で起こっていることに目を向け、正しい知識を持った大人になれるよう、様々な勉強に励み、多くの挑戦をしていきたいと思う。そして、この研修でお世話になった、家族、鳥取大学の先生方、マケレレ大学の先生方、TA さん、ウガンダでの訪問先の方々、この研修でともに過ごした仲間、全ての人への感謝の気持ちを忘れずに、今後も努力し続けていきたい。



最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

〈参考文献〉

www.education.go.ug/

<https://oec.world/en/profile/country/uga/>